

書翰初學抄

草書石刻日々ニ用ル所ノ文章漢文上中下ノ書分ケラ
アニタ板行有共石楷記ス書狀ヲ認ルニ此書ヲ見シスヘテ用ヲ達シ不足ナレ△

子昂	千字文	大字楷書全二册	赤壁賦	楷書中字
石刻	千字文	中字楷書全	戀花帖	楷書中字
	千字文	中字草書全	初聞帖	大字行書
	承光殿	大字行書	大字行書	全
	洛神賦	細字楷書	秋興八首	烏石楷書
	秋興賦	細字楷書	渭水帖	楷書中字
廣澤	公子行	董其昌全	草決百韻歌	枝山
先生	蘭亭帖	草書中字	飲中八仙歌	行書中字
后刻	赤壁賦	行書中字	醉翁帖	草書大字
	長恨歌	行書中字	君王帖	八分行草中字
品目				

石刻目録

曰東尺牘

祐齋先生書

日用書翰文法ヲ總集メ唐ノ書翰認方并ニ
人倫草木魚鳥都テ異名其外書翰要用ヲノス

日本宋時記卷之五

秋

涇涇書律序志よとく秋を嘆きたり抱焚鉢をもとめりも成數
す坐ひたり閑雅ニ極と云ふ。和経よ秋とあまと別せ
しにあまくわきあいとぞうそりえへ湯をうへて遊ぶ
氣をもとむるが氣をもとむるが氣を陽までりて天色清る
なりとんや一ぞのが月れ
龙あまくわきあい時あまくわ

寒風よとく秋二月これと寛平とつて天氣乎とあよ

瑞

瑞事以て明さう早く新たまめよく取る事難と
作ゆせよ志致して安寧にて休刑を緩一祚

氣

氣と收斂せしむるよとく車よりて其志と
御よとく車よりて其志とく車よりて其志と

秋

秋事代無すりてすりて書收へ送りイこれ

遂たがト附くわら勝氣かつきとやゆやゆを食油しょをすば
老お年ね論るよそもく夏なつの秋あきの初はじ塾じゆどりより甚ひ
天あま付つ衣いとぬけ裸はだかして寝ねと貪むさりよりなりれ立
腕うでの脇わき穴あな背せきに余あましゆく人ひとにて扇おうぎ毛けりて
風かぜと取と又また衣い多足たぢゆと露あわせハ風背かぜより入中風ちゆうかぜの
風かぜくちゆかぬこれと波なみ一いつ死しり一いつ疾めまいりと
是これハ八味皆良丸はちみやうわんと服くわヒテ二ふた百ひゃくと之の葱ねぎ蒜さい
月つき令度義れいとぎよそく株きず三さん月つき收斂しゆりょうして巣揚絶縛くわうぜつばく
多事おほことり

授生漏じゅせうろうよそく秋氣あきを煙えきえ煙え草くさと食くわ

て子これ惱うなづきと惱うなづきと

書し生漏じゅせうろうよそく金かなと金かなと至いた而は事こと甚ひもやうめの小こ田た
疾めまい癆めまい瘡うずきと至いた新しん穀こ初はじ塾じゆ一いつ死しり老お人ひと
これとくくい宿しゆく瘡うずきと朝あさす朝あさす新しん采うたるよ食くわ
食くわい風かぜと朝あさすと朝あさすと又また早はや搾しづの半はん熟じゆせ
搾しづくとやう來くわとお裏うらすとお裏うらすと宿しゆく瘡うずきと朝あさす能のう脾胃ひとやゆやゆ新しん穀こと
病い人ひとよ害まことに

月つき令度義れいとぎよそく秋氣あきを煙えきえ煙え草くさと食くわ

焚^{アハ}セアシテモアリケルモ作リヤモヒトガ
小児丸もやく火よ血^{アツ}ムス

搗^{アハ}シ滿^{アハ}ヨリシク株^{アハ}ノカラキシテ水^{アハ}トモモウリ

衣服^{アハ}ト無事^{アハ}ト

金賈^{アハ}要累^{アハ}ヨリシク秋九十日^{アハ}金^{アハ}鰐^{アハ}ノ脚^{アハ}ト食ヘリ次
ま東極^{アハ}ヲシク古人の云秋薑^{アハ}と食^{アハ}シガ^{アハ}れんとて
高氣^{アハ}ト窓^{アハ}セアシテ晦^{アハ}店^{アハ}後^{アハ}縁^{アハ}キモ又林薑^{アハ}人の
天年^{アハ}ト人^{アハ}ヒトツア^{アハ}張^{アハ}引^{アハ}強^{アハ}ま邀^{アハ}クアシクハ九月
やかく薑^{アハ}と食^{アハ}シ毒^{アハ}モアリ眼^{アハ}と黒^{アハ}め^{アハ}ト微^{アハ}
弱^{アハ}力^{アハ}と減^{アハ}ス

六日沐浴

七日七夕^{アハ}と云又星宿^{アハ}と見^{アハ}シマ^{アハ}イ^{アハ}荊楚^{アハ}家^{アハ}シテ^{アハ}シ^{アハ}く

七月七日織女牽牛^{アハ}役^{アハ}合^{アハ}リ也^{アハ}モアリ

五雞^{アハ}學^{アハ}ト元^{アハ}織女牽牛^{アハ}の事^{アハ}織女^{アハ}役^{アハ}合^{アハ}リ也^{アハ}モ^{アハ}季^{アハ}
タ^{アハ}言^{アハ}トウケ^{アハ}物^{アハ}西^{アハ}ハ乘^{アハ}櫂^{アハ}乃^{アハ}浪^{アハ}行^{アハ}ト花^{アハ}せり^{アハ}也^{アハ}
也^{アハ}シ婦^{アハ}人^{アハ}也^{アハ}シの傳^{アハ}シ^{アハ}墨^{アハ}美^{アハ}トシ^{アハ}アル可^{アハ}キ^{アハ}人^{アハ}
軍士^{アハ}也^{アハ}シ^{アハ}都^{アハ}役^{アハ}アシテ天^{アハ}上^{アハ}乃^{アハ}列^{アハ}宿^{アハ}ト^{アハ}テ汚^{アハ}蠟^{アハ}ト
破^{アハ}セアシテ也^{アハ}シ^{アハ}至^{アハ}シ^{アハ}莫^{アハ}一^{アハ}頃^{アハ}方^{アハ}ナリ^{アハ}ト考^{アハ}う

せりゆくはくとくの事ゆまむち
よ久くもあさりまくらのうんを望むる
あやかとくの御ひの料り一仕方げよばま
わひとせうれれあくすきの暮りをせうえ
ひまくとくのをたまゆまてられとくとく
ひそが天とゆきれざるすくとく株れゑとく風
えれ多一物事の料りの如くとく人を
せ事とくとくを竹とくねりとく倍よとく氣とく
二月あひ次とくに案時難記よ七月七日八月
酒済とくとくとくとくとくとくとくとく

セタノリうの糸葉鳥よよかひ
乃川水りけせまの桜風みぢひとまれて時をまく
古今集一丸山内羽恒
年正のあて定むセタノリぬうよのひそとれり鳥

新宿撰集よ お宿駄豆

すくに乃ふ作をあく 七夕のたえせめひ、行ぶそれ

七夕乃の 杜殺

雪濱月夜一 おもて。殊抵經年引恨多。最恨明湖
波車雨。不度回脚渡天河

又 墓器祭

雪怪と波斗柄移。鷦鷯鳥慢ぬ鶴。天使精衛
塙河邊。一冰還無有。老翁

又

織女牽牛雙扇開。年々一反の河東。言天上

猶おとぞ勝人間去而

○今日索餠とくと車りう十節記よとくひ。詠
氏の如く七月七日よりすと盡思報となり。今麿
病とやうじうれぬ日はねよま解とこうくゆふ
毛衣のよびづく索餠とくとくの盡とまひ
人この日索餠とくとくひ瘡痛とうれえひ

ば後だううなりあすとくすと瘡の外風を
異溼よ感。肉飲食色慾よ傷れて痛りまひ
財運みを夏傷秋瘡。秋の瘡。セカシキアリ。され
く擾乱せへとのづくうらうらとくらへんとひ出

日索餠と食へに會ひて宿根元より一か八
九日數とまぬうる事ゆくや決してこれ往
キ一世の人かは未だと後もアリ

○今夜二星と申すと心累と済の念めとせり
香氣をうき草へぐくに立色の象をつしむす生
きく男女の衣能事とい乃れ此れと乞所
歎とつあつて衣能と驟一書事とさへ事
あくは筆半日本にて天平勝定七年にアリ
レヨウの事根原よ又アリ翁女季の做武姫義又
七夕まかみアリ翁女季の做武姫義又と祝まく

て梶ノ葉よかくアリ勃起推集の奇ニ

幸あれよのあらきの正月半小物攜れ梶ノ葉もあは
乞巧奠ノ事氣附化風毛化すよ力も出れられ
スアレ奴久々來たりトミルを嫁人妻の
内もあきにば事とならハ行かずアリ越後に移
内もよ事とは行らず書務衣服とさへと化
の國ふと正月半や都満ち股中の書をさし
流感を撲鼻禪ともいへぬ死に也あらゆり
七夕の苦れ衣とアリ身を今まにけとあらゆ

激美叟ウセタスノ皆也

天と紙壁ゆ此物万古舊敷署秋深手水也
多鬼藏不招人間乞巧擣

擣杵七夕代詩

事令幸半言若何頃邀微昇金橙年々乞興
人向巧不遙人召巧宋夕

○今日革丸と合せ麺と坐てよしと写風月令は刀
たりは日皮裏と腰せハ垣庭と重慶七藏にさり
又角嵩と取て毛筆書寫れかよ主に蠹と辟
あ望奉執は刃てより

十二日二日より今日まで乃ち氣すゞる日雨一ぱ
懶磨と拂ひ聲遙とかて塵埃と泥まみ益す
へ一丸懶塵をもてて一年にてひ一柄が
より冬懶塵とほゞてとよと日アドグく天音を
よく耳すゞく惜れもうむひもひしてよ
○生翁の絵本とぞ身をうりあすねやう之
うより酒あうかとおうり又餐とおほきうり
とお母子うりうりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

お力うるがうれし事のうち徳たゞく

○今來世信れ人を以て福のあら東とくやと福
の印よあく重ねる所う愚吏愚姫せしりよにす
士眾よたらんを智く安坐せざりや佛民乃役み
まどひ宮よして夜神そ乃福盡來隙すとせせん
かかよすす事とあは人多しくては打至り
コト多ゆされハ由難絶する中元乃御冥通と密々
一引纏くる人冠服と急ぐの即よ出でとゆく
楫襷一被と卒す入喪年へ又これを送てか齋
乃縗と並よびこれと織よからうとわきハ有る

まことある事のゆきふく

十五日今日ヒ中元と云圓供蓮華と織一て本家

ニ祭一報國小とく

揭もるに事ト紀五と今世七月十五日管僧尼修福之孟寧事本日蓮東

後代度母并修乃公哥木前行拂工巧也今人能以作御國報か其前

ハ善縛中財難饑果食注目蓮故毎晝像立之鑿之妻美と汝三の念

數多金假ハカラスニテナシ母せし報化墓と接掌す今日墓と

死後今宵墓前と能くと拂す月全度義と中元本

死後をこれよりあくと素食一生經考妣化蓋牌と

却て飲食とうかへ湯果と拂ふねて身もあくと身も

又此よりや參拜詔は七月十四日祖先と祭儀

奉食て墳墓と拂す所これ後歴乃役よもよひて

かくはまくすむらへ一再もとえーとよきを聖人乃
送ふやうとおせ禮義ちり西風よむりんへひめんを改
えりて
先ののじく葬親の儀式をすこしとひなむ
十一月廿日賜御殿御殿御用
ヨリ又やむ事ある
シテ候よあらがうんとあらひ生れ乃幕をかよ飯食と
さゆる墓所よりそ跡一墓前よ焼魂とい樹すヒ
生れたるが食とまくよ殊慶にて御生派
をひがくにすくうけ凡今夜是世信きぞぐて報
あらへ墓よひく絆一朝御行くハうれとくの死
まくの報わくへきそうむくきやかく
そく一死くせりタモトヒニ逃亡するヒ矣あ
凡家附地在らうれとくへきよ事多一中
毛七月十九日孟教事の後よ佛經よより
眼蓮母と般若と三尊の本也と次あらは老
母庵等化よと立ちあ教中えよ事解と生れ不
よかく竹と柳と盆の形よさら紙縁とせ中
身解くこれと竹ひようけ火と骨くやえとせ
桶つ木方隅と刀と木をたまはくと解と孟教事
よ木鐵瓶窓さまでよ孟教事と竹とひく所て二脚とか
て生れと享一秋だ教事と告うととくをひく

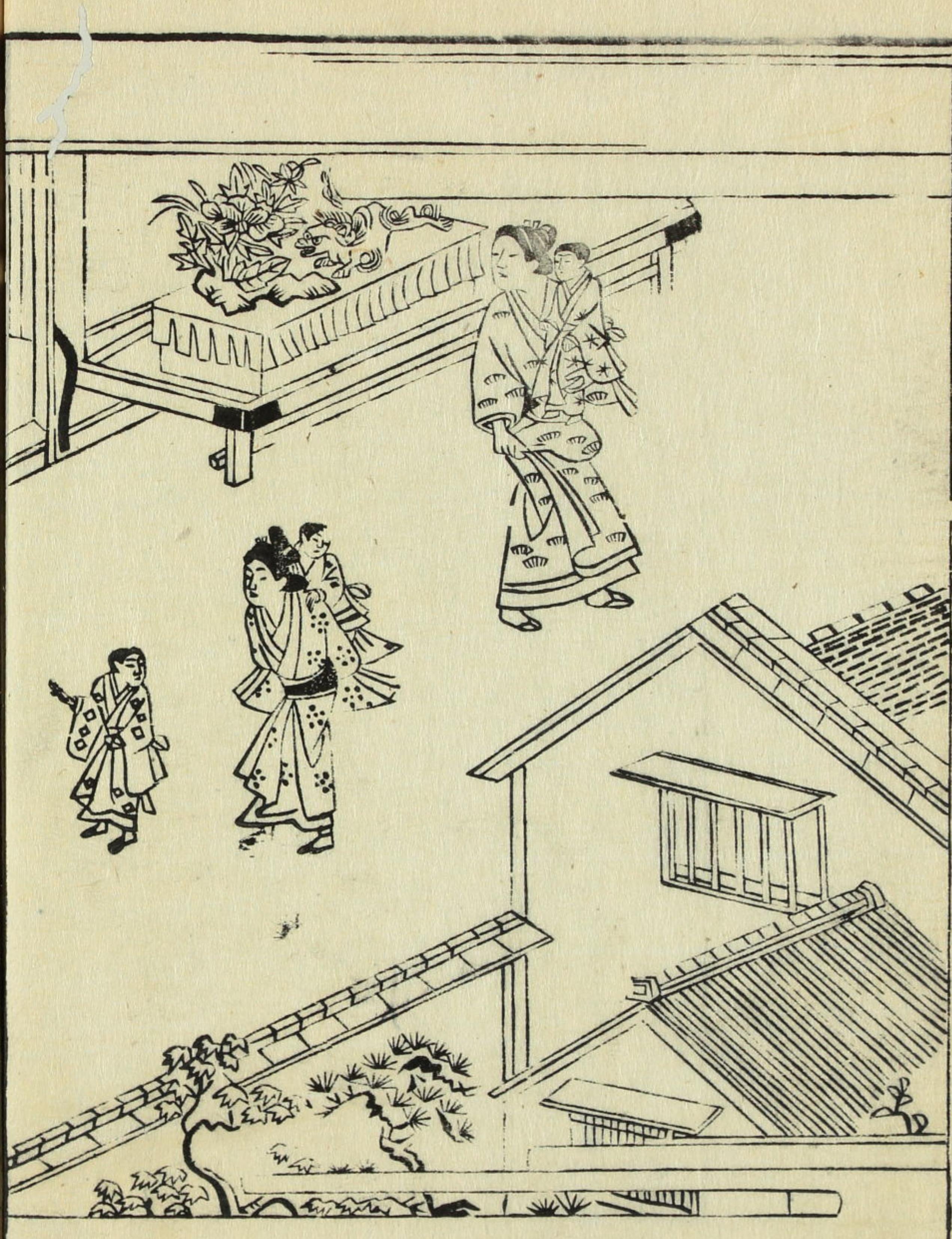
うちの風俗とやらもれいかに事とゆふまく
源氏同運之事と説かれて云はく孟嘗君經
考へて書を以て風俗とあざむくや我國
孟嘗君の後事とどり事聖武帝の天平
五年より始り一ノ歳日本紀よりえて年中
以車輶坐す者と號を被る。

きよとや良也が御子と傳ひ云々と又曰がく
○五難經よりして月半元日酉年をとす一圓満
母鬼鬼道と漏と虎と狐と功徳と徳と徳の宿鬼と
おと食とくらむとひのきととて世俗たゞひ源氏

乃後よりとてもうてうき代祖考力天皇の登
極樂世界よりまひり事とゆすて徳鬼と有
てこれとすとおとせめにあひた甚くあり

○能育より十セハ前半く萬物とあるのを加エ
能と能す能工と考へて少くり能と考へらん
内足の事と考へるが能と能とす後極門院寛義のあ
ありきろと云ふ事初考えや元とす能と能すと云
やうとくりと云ふ事能他の洞とおとせもと
云能能と云ふ

○又ヒ日世後山海乃瀧瀧とせぬそろひと云ひ
云や居の重ね事と中元日忙佐祠不採魚と云ひ



十六日 開活山日男女三日遊樂と事とすフやどりと
奴婢ノソシトシヒテアリテアリテアリテアリテアリ
○今夜も寒氣甚強ニ希壁に透し月と寒空一秋
秋之月もとゞ高月公臺ひはまう八月十五日九月
十九夜も月と雲すり乞ひ候か一月七月の三晝期
なし好事ノ人ハ車城ノ所と申すと申すと今夜代
月と雲霞と月車と申す

晦日 法事

は月夜深冷ちう夜と勧く風と同様に備へ事
すれども万葉ノ事あ表氣うとく志く風不

感ドヤレ 赤感冒傷寒を瘧嗽喘急乃病也る情
てこれと避へ一

は月夜深と寒き柳漆と扇ひ扇ひ扇ひ扇ひ扇ひ扇
とち印とく拂拂去斗よ冰剣半分入月令度義
かくあまく水多くされハ 捕又入室一兩日と湯てく
あまくすくちくわ
ちやうけと取ふことすり毛と一箇毛とつゆ
又たち毛とたかすに水とひぐりヤと入そ先とあ
湯てく留ぬよ常の日ちがひ毛とすり毛と各別
毛と入室一毛拂拂毛久ととけハやまく減
毛とすり毛よ入そちよせまよと能ねやつ

又桶ハチ竹筒タケヅイにて水ミズ入スルて至ルト、又桶入
板いたと同シ、もうべをも減ハリ、甚板アヤマツよりうるみ
よもか蓋カバして書フれど、かくそへせばされ
やまは取サクす時メタニ、又桶入ハチスルとわきうきの取リ
あくや栓サクとさすあり、又桶入ハチスルと人ヒトの取リ
通スル、差床シラベ、重タメハ動搖ハラハラ、而テ栓サクせす

天氣ヒムカ好シ、太ヒロ幕カーテンをり、桶漆ハチスル、奴僕ノブ、命ミコト、志シ、浪ハラハラ、
紙ハ、シート、繫ハシル、先ハシル、より、表モチ面モチ、より、紙ハ、と、ゑハ、ひ
ぬハ、お發ハシル、ゆめハシル、たれハシル、紙ハ、の、ちハシル、と、ひハシル、宣ハシル、と、ある
事ハシル、至ハシル、一ハシル、又中ハシル、用ハシル、ハ、友ハシル、おもハシル、おもハシル、
金紙カネハ、と、あ、日ハシル、り、あ、の、ひ、の、う、又、や、ま、す、り、よ
ち、が、ま、そ、の、う、う、き、く、つ、ぎ、ほ、ご、け、く、を、ま、し、一ハシル、貯ハシル
ちハシル、と、く、ぬ、ま、す、し、ぐ、す、そ、う、の、う、と、冰ヒカリ、よ、へ、う、と、去
て、一ハシル、あ、の、壁ハシル、や、ま、の、壁ハシル、の、ど、く、や、ま、う、か、ま、く、と、紙ハ、と、包ハシル
か、ま、と、仰ハシル、し、う、こ、の、う、と、仰ハシル、と、た、の、能ハシル、財ハシル、が、又、取ハシル、が、さ、そ、え
て、室ハシル、方ハシル、か、天ハシル、手ハシル、と、雪ハシル、う、と、う、室ハシル、の、ま、に、打ハシル、と、す、て、う、れ
く、あ、む、に、う、紙ハシル、と、う、う、ぎ、つ、が、あ、ま、右、れ、う、ら、う、ま、ぎ、う、
と、見、つ、う、ひ、う、あ、が、ま、う、の、よ、う、り、か、二、子、作ハシル、か、て、う、

まくに通じてモリモリひらびとひらふあさうぢり紙
のあやかとあざとひたあめうぢつを紙とくわう
ひろきとけと利とくはまをもとひづて放と
ア付白紙とあらとのをひやうよそと付合古附又
吹きくとひり紙とあらのをひり付合古附又
ア付白紙とあらとのをひり付合古附又
吹きくとひり紙とあらのをひり付合古附又
因みにり紙すりとらか、もと無な因と勢すくと
引いたれどよ食はんものとくして紙すり下りが
異紙付合古附とすりあざと引て紙すり下り
まよあざと紙すりの外とぬよせと紙すり付合又

カタハアミナトノモトヨリ一塵んたり付うとアリ
モクシテキモチヒトムアサシ 郡^{シテ}とぬき地極^{シテ}
テモアリテテ紙よ志^シと引^シサセテヨモ^シヘ能
もテ^シ付地^シ移^シヒテ不^シラク^シ志^シと引^シサセテ
付^シ後^シ日^シよ^シカ^シリ^シカ^シリ^シテ後^シ又^シモ^シガ^シト^シ三^シ元
引^シ毎^シか^シ平^シ一^シ勿^シ敵^シカ^シリ^シカ^シリ^シテ^シ前^シ又^シモ^シガ^シト^シ二^シ元
表^シひ^シ後^シ裏^シモ^シ引^シカ^シリ^シカ^シリ^シ一^シも^シ一^シカ^シリ^シカ^シリ^シ上^シモ^シ
沙^シよ^シカ^シリ^シカ^シリ^シテ^シヨ^シ一^シモ^シ紅^シト^シモ^シハ^シ取^シカ^シリ^シカ^シリ^シ
け^シ繕^シト^シ観^シ

よりそ、毛中よハ菘蔓苦ミトシムサケハ叢食ナリ
あすハ月の後ヨリ一莖蕎麥を出さず。これ
をやく蘇され根タリ。七月初ヨリ一莖蕎麥
莖蕎麥色蕎麥と同財ヨリノアーテ根タリ
宅外は生モクナ。よく育てドリ。胡蕎麥と八月
ノ初ヨリモ可なり。大葱也蕎麥トモウ。大葱敵
トウモロコシ也蕎麥根トス。

七月の末至皮トツヒキモテ毛丸と去皮
と收日よ乾す。

八月蕎麥ト食ひ多キルモトヨメ渴蟲巧リ人ト寒す。

食ハ因ト擦す麻様をテハ氣トウジケン
トクノハ祚事とヤム。息敷と多々食ハ人ト傷
害ト食ハ氣トウジケン。多々食ハ暴震
乱を起す。生薑ト食ハリ。熟肉多々食ハ祚
事と擦す。立秋の後蕎麥餅及水波餅と食ハリ。
立秋れ後十月死ト多々食ハリ。月令度氣变書
七月中蕎麥根モ冷水と多く食ハリ。之
都脚氣をも後日よ御りて病と生す。又八
月内乃満季モ少々よ御り。脚氣生冷ハ物墨多々
と多々食ハル。脚氣由浮足癰而癰病トス。

主事者も御まことに

七月久お候未一涼風至二白露津井三寒露至
右立秋のと條即ち方に鶯乃全多才立至振
振其肅身古未乃登右立秋矣其二候方
立秋至由平方朔十分辰甲子二朔立平分寒暑
至由十分朔十分夜半十朔立平分月令度義

八月
空氣、八月の常秋候也。八月乃中之八月の異名也。秋月也。
櫛葉、猶言秋也。且とあるとよ。八月の和名也。夏月と云ふ。本丸鑿
里アラカミサカツリ。秋月也。尼月也。又月也。
足と脚也。トトロ。奥也。足也。尼也。足也。

が爲め、八月の秋成は八月の中の八月の星移り仲林 背
櫻葉御とあ昌とよの八月の秋成と毎肩とよ本山

子と醫者トテ奥筋知よ忍ヒテア
シテ能ヒムカヨウハシメテ

事あつて是の根はよどもことあらずと見えず本筋たゞ又
西壁あるをあらず世俗の風儀あり亦假名紀よ建也既
第帝乃乃即ち事あつて先ハ男をとれとね
とが教かくも事あくまよのアヘン内にとくにけりも
セウヤヌ光明寺大岡村之承の元よせ七年より家
族よ天下に高仰せうきのを終アリ諦々建也其
内乃事ナリ人をうなが候よ後院也院ゆゑと云ふ
て加麻通方ニ代すて四社乃く財山用事と申す
事多シトモと申すを知ル男女多よまりけんと云
事多シトモと申すを知ル男女多よまりけんと云

内と外をあらわすことをP傳へてうるを主事
毛所りたる事のまことを察するよりだる年
紀も分明をひくとへ後湯紙洗ひ山口の河原
あり乃らずをよしや御くよし年中ひまれ
志野のうらす徳寺といふとひこうはよせう
つままで仍そぬとちりへ年め津よもよけ
於とゆくとへ大内殿が事かとお趕先へゆる
事とゆく又鷹も巣り室まゆむよどくはやもの
ゆくとゆくゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

一比たゞまつてゐるを以てよほせにまよひ
宣ふ乃ずがまかせあたはるより
ひわせよろこまだりとくまれりる所とに
らえそぞれあり肉毒のつまみ所乃
あつうかとこれ事はううまつて又も育よとこ
かうとかまわとおもゆやとこのれ事はま
せ事はまきつてはかまやうえてまつては
とくひとくあれと今もされとくあつてま
まつて事はり

今事多已成化也勿以之急之先之于家

の通後代後よりかとて始まつた事一基久アキハラより
不きりんがトそれとて近義式はあはれ事ありて是モ足
文次するもく画史アシヒトモセキムアリハツブリモ足
経り給へる事根原ノ役トヤリトミトテニテニテ
近せりてごやいぢらものうちまめ難便とシテ書う
づくをハ後書あらんう難力もとシテシテ事実
をきくうすくぬる多々タチ今じ書よ引風アキハラハ考アラヒ
御ミササギ又今ひそく小草よ秋乃画報アキハラのもの
とよよゆふ田のまれづわらとつ手りアラヒと
うよと、月羽腰アラヒとます候よもと膳膳アラヒとす

月令度義潛確數アラヒにアラヒアリ膳アラヒハ田報アキハラの新
カクトガラ奈アラヒナシハ日アラヒ小れ、前アラヒの禮義アラヒトモ
アレ教せり事ナシ

○今日夢狂アラヒトリ 将軍家よゆ筋アラヒ又 翁家
「りをひ筋アラヒトリ被アラヒ可アラヒ事ナシハリ」
十四日明夜アラヒの後時アラヒくうとびこれば乞アラヒモシヒの月と
考アラヒトリ後明夜アラヒハ月十四夜アラヒ也
銀瀬アラヒをしきう霧勝垂アラヒ。正月初アラヒと歌圍アラヒはは櫻春題
宜生アラヒ夷アラヒ明夜アラヒ後時アラヒ未アラヒ可アラヒ。

十五日中秋アラヒと秋九月アラヒ也ナラホキイ四倍

今日、福島へわくりやく放生會とすじ事は
宣治十四代元正天皇乃所す雲霞院年九月よ大隅
日向支國乱逐すとれゆみ因裏より流軍す作の
八坂神社の社室奉徳勝波豆栗御軍と引率ちく
彼國と極一車船をと敵とそしうりうばら
八幡乃山社宣よは度の合氣多々七八人と殺され
左前坐とあじとすと御祀ましくこれハ佐國よ
ソアモムヒ飯とそりびりひりと。被棄記に
見えアリミテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

ひ事りわくくと同仲見つや御案合編
日本八月十五日放生會呈石誠其案有中國焉
蘿あ鄰とあらせり年中ひす年余新中細乞
せよかては既承教乞之とあじいきとと多詔乞
〇今乞と秋叶市中すく甘月紙意ひつある月夕
三と二五夕とをアキ人賀宴の時とせばくタス
林はふ跡一概よそく令秋月と秋月とたゞま
彦れ世より基行て御人丈人至承サヤとソモ
左雲霞よ端始起のめり激人の中秋月をな
うてじめと極と何時も遅れせずともある事

予又作石像以名之。有銘曰：
狀似仙人，月解其形。貌若老子，又月解其風。
笑口常開，看月無心。口口口口，月令度數，口口
歐陽彥說月序云：月之為說者，別於星象，大定於
別蒸，更大變也。歲月，新後入敵，後復從宿，說被之
於財。後夏先冬。月於牀，委蛇孟陬，才立於初之月
之中。移於天庭，別定真氣，均取於月數，別據兔園。況
坎壘不滿，大窓無缺。縱骨御徊，游神上浮，昇東林。
入而稽肌骨，與之殊涼。祚氣與之清冷。

○事多無常，月移多變。月去水之精，被毛含氣。
終古今葉，天厚以沛元。

月上而分，月下而合。月之合，月之分，月之合，月之分。

形動種集，一也。達法歸

口口如水，水之味，水之味，水之味，水之味，水之味，水之味。

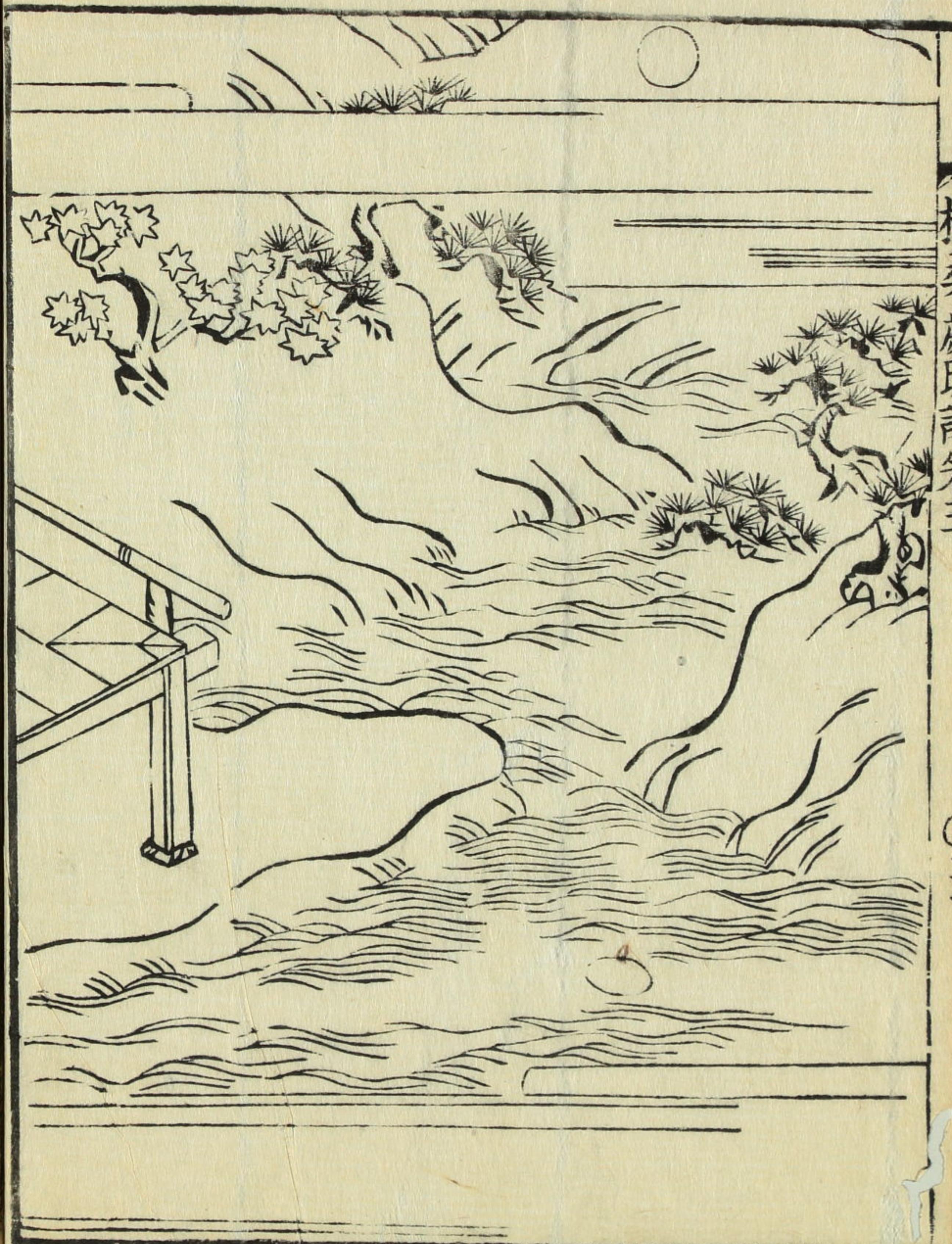
如火，火之光，火之光，火之光，火之光，火之光，火之光。

金水性相反，五行分其事。別知天龍同，地感各以素。

口口口口，口口口口，口口口口，口口口口，口口口口。

金家集口口，口口口口。

口口口口，口口口口，口口口口，口口口口，口口口口。



徳景安^{ウカ}中^ウ株乃^ノ猪^シ

萬里秋空掛玉盤。便擣黃蓮月也。四顧此月。
名是別人。古今有冷眼。看。

劉子魏王

夜。他過。月生。邪。此物易。天網。獲。引取。
秋。江。吹。深。入。鋼。壺。報。曉。更。

杜子美り詩集

萬物皆有裂隙。可以置
身焉。故不以爲難。而
以爲易。則萬物皆可
得。故曰。萬物皆有裂隙。
可以置身焉。故不以爲難。
而以爲易。則萬物皆可
得。

邵康節

中酒と云ふ法といわゆる方
二十七日孔子乃生爾後之日
それ以降を文政年號
はかばかしく思ふ

もうちうしの社日とく三秋乃後中又の成日土乃

神とまろもろ^{ハシ}（此ニ二月の郊）^{ハシ}とまほ候^{ハシ}とあくは天と
地うき^{ハシ}て日月の事とす。紙^{ハシ}とあがきて
物^{ハシ}族^{ハシ}の祀^{ハシ}とまほもの事^{ハシ}がまほ淫祀^{ハシ}をまほすよ
り^{ハシ}。一ノ政^{ハシ}とまほひりわ^{ハシ}の風俗^{ハシ}と遇^{ハシ}く喜
秋^{ハシ}は秋^{ハシ}の事^{ハシ}とまほ事^{ハシ}あり。他^{ハシ}に鄰^{ハシ}みもハ九月^{ハシ}
比^{ハシ}ち他^{ハシ}の神^{ハシ}とまほ先^{ハシ}とまほ秋^{ハシ}神^{ハシ}もまほるや^{ハシ}。
あくはうとうむまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう
とまほの日^{ハシ}かれた農^{ハシ}高^{ハシ}の事^{ハシ}とまほ他^{ハシ}村^{ハシ}もまほす
ぬを齋^{ハシ}餐^{ハシ}斎^{ハシ}乃^{ハシ}宿^{ハシ}多く事^{ハシ}まほどまほの齋^{ハシ}餐^{ハシ}よ財^{ハシ}と
費^{ハシ}一^{ハシ}あま^{ハシ}とやめりきのおり^{ハシ}とまほ所^{ハシ}彼湯^{ハシ}之間^{ハシ}
やめ季日只一日と用^{ハシ}と命^{ハシ}せらむをまほへ總^{ハシ}房^{ハシ}
ちう^{ハシ}又世俗^{ハシ}八九月ち他^{ハシ}の神^{ハシ}とまほ財^{ハシ}饅頭^{ハシ}粉^{ハシ}
あ^{ハシ}と製^{ハシ}して有^{ハシ}家^{ハシ}參^{ハシ}。狹^{ハシ}廣^{ハシ}郡^{ハシ}里^{ハシ}よとづ事^{ハシ}
けうをうとく^{ハシ}。神^{ハシ}の事^{ハシ}がまほすれどまほすや^{ハシ}差^{ハシ}算^{ハシ}
程^{ハシ}ま秋^{ハシ}社^{ハシ}。社^{ハシ}酒^{ハシ}粉^{ハシ}とまほす
上旬^{ハシ}小日^{ハシ}と^{ハシ}様^{ハシ}々^{ハシ}參^{ハシ}と^{ハシ}
殊^{ハシ}か乃^{ハシ}日考^{ハシ}娘^{ハシ}先祖^{ハシ}神^{ハシ}とまほ^{ハシ}一^{ハシ}陰^{ハシ}ま^{ハシ}
より^{ハシ}後^{ハシ}氣^{ハシ}日^{ハシ}とまほ^{ハシ}一日をやう度^{ハシ}ま^{ハシ}秋^{ハシ}
和^{ハシ}て日^{ハシ}來^{ハシ}い^{ハシ}。食^{ハシ}空^{ハシ}腹^{ハシ}とまほ^{ハシ}とまほ^{ハシ}ま^{ハシ}
乃^{ハシ}あ^{ハシ}ま^{ハシ}行^{ハシ}ゆ^{ハシ}

月夜の廻郭野原の草報す

伏見の宿場にて人を教誨と爲して狂生乃重春に與
てはるか歎感と覺ゆ

山月夜風あり時人多く風よ處
毫端よりとて有りづく秋意萬葉と並一毫中やうふ蠹色
さやく絆うよまかへりすば有うゆきとすさすく春よ
萬葉落葉をとて有の初春一萬葉にやまくの葉落
ゆれうへ生せよとて有にゆきうゆ出芽まくの葉
ひあり葉葉にゆきまくとてゆけ秋の日暮一と
ゆくゆきもとてゆく九地ぬとゆくにたがむひの土

熟^シて肉^{アツ}と骨^{カル}を取^リて、
骨^{カル}を洗^{ハシメ}て、骨^{カル}を去^ル。
骨^{カル}を洗^{ハシメ}て、骨^{カル}を去^ル。

どう在 牧門

は月を手と接へておまえ其事に之を元採根多ひ八月採者
之を秋枝桑於竹津洞隙處下本秋採宜時事莫衰葉各
温其本熟也もとより二月乃都す

洪月竹と云れハ唯す月令度数より六月二

竹と云れハ不疑と云

をうそ姓至ト一元物也羊不恒法うかき代役と火

みくやきの煙也と羊とあひされハ承く不疑ま

考る麦稗の灰汁をく洗ひわきより油水より一也

洗ひたる毛虫も少くすから幹後柏矢橐本刀等も若達

ば月又端代稗と收穫ト一布と傍へ紗衣と用ひ縮布

と染毒をなれこそ外用羊

八月天氣渐冷なり多く生果と食ひり次生蒜維猿井
生蜜蘿子蟹と食ひりがうれ又萌芽と食ひりを忌
夷名は書畫月令といふ重夏及七藏より多くじぬ乃
度義よりそぞり重夏及七藏より多くじぬ乃
流泉と終事あり人をして療肺軟と云せしむ
八月の右候第一箇風東方乙亥日庚寅日丙辰日癸
未太白犯乃三候あり中日に雷始收聲方立
轍戶方去冰始涸右秋分乃三候なり
白露至立午刻十日夜半七刻立半分秋分立五十
刻夜立午刻月令度数

卷之二

卷之三

翔白 今日より八日まで
あつせきな
船旅とま

八月休署

此日寒陽と云月と日とニモアラ老陽乃の數よカ努方
ノカレシムトマツリテキタリテキタリテキタリテキタリ
矣又今日栗子飯と食ひ蕎麥酒とのもももももももも
他方より侍り某處雜記よ二種寒陽尙饗之釋而未歛者
玄かの栗子飯有加肉者と云ふ今自解と食矣六黍種す
と以てこれなが解了て食されれ事と又おもやけまんの
嘗て主事と云ふ事と爲め粟不入室下
行氣と呼ゆ乃の實と云ふ事根本よ

おせりとてゆきやあすすむをいもく
ゆきぬむる

鐵弓卷上公卿爭之以得
左司、子由、子瞻、子瞻、子瞻

多喜の事に心を取らざる所
す、キミも毎日おまつり
徳島守備記より多く、波南の植桑とひよの費の房
ノ内に久々とある御亭とあつて、阿賀名房植桑
かうりともとく今茲九月九日、ゆきありよ空
緯裏とぬひゆやに某東とよき、骨うちうきみ
ふうて萬福とのやまと此後大瀬は植桑より
言と作て、九月より之をやへれどくせし
を考へつてがたくて、あ申れ難い段、牛早もとく

死たりせら爲これとゆゑこれ汝り命よかうりや
ソリ世代へ九日よ御の毎くつよむと萬るとの
歸人菜黃囊と茅草もば山とあんは夜を廻候あ
羅組よそく九日菜黃と佩ひよのグイ萬氣也のむお袋
費共房極承え家と遊の御と教くとくろれ本やくほされを
西京雜記又腹史人う傳見賈佩蘭家にうて九月九日蓬娟
と食ひ薦てのじめすれハ今きてちまうす一びまのな
下りはてモセとあ波と傳主ハ漢也又月令度義よ傳書
をもとてうそアハリ極承よ始うまうだり
と引てどもハ菜黃と辟邪翁と一萬氣と延壽
客とくあよ九日比二ノ物とかりて湯丸の充と消
をもとあん薦すとくもば後後續とすつてたゞ
用もと同上又九月九日律主齋と御り數べ九
月九日同上

召亦は俗に日と尙んぐ菜黃房とわて改
捕む先通氣と辟邪^{ハシマ}て初秋とあせぐをも
とめつ是がん西後からくふ又今日萬氣のあ
鬱翁あくもモテ御法萬也節の附花を墨筆を
せしよ參考にす^{ハシマ}こと不と讓^{ハシマ}一東平九月九日よ
とく風あしてこれと然事よこれと萬氣房とくほ
西京雜記よとぞ

○立義作也一日と薄^{ハシマ}と上色櫛^{ハシマ}年七夕重陽へ中
新^{ハシマ}を賀^{ハシマ}とおもて信^{ハシマ}をうつす九月日三日奇^{ハシマ}
志^{ハシマ}陽敷^{ハシマ}よあつとぞうりこれ古^{ハシマ}人陽と萬^{ハシマ}房と

すり、ちゆ木をてて、うらは役所へ。かく人
ひきとて下とての扇へ。かくは後くろ代義
とあく次郎玉屋家。城女植家。もととく職
てじゆこすそひのまつわめり。

綾平載集よ新院別當典

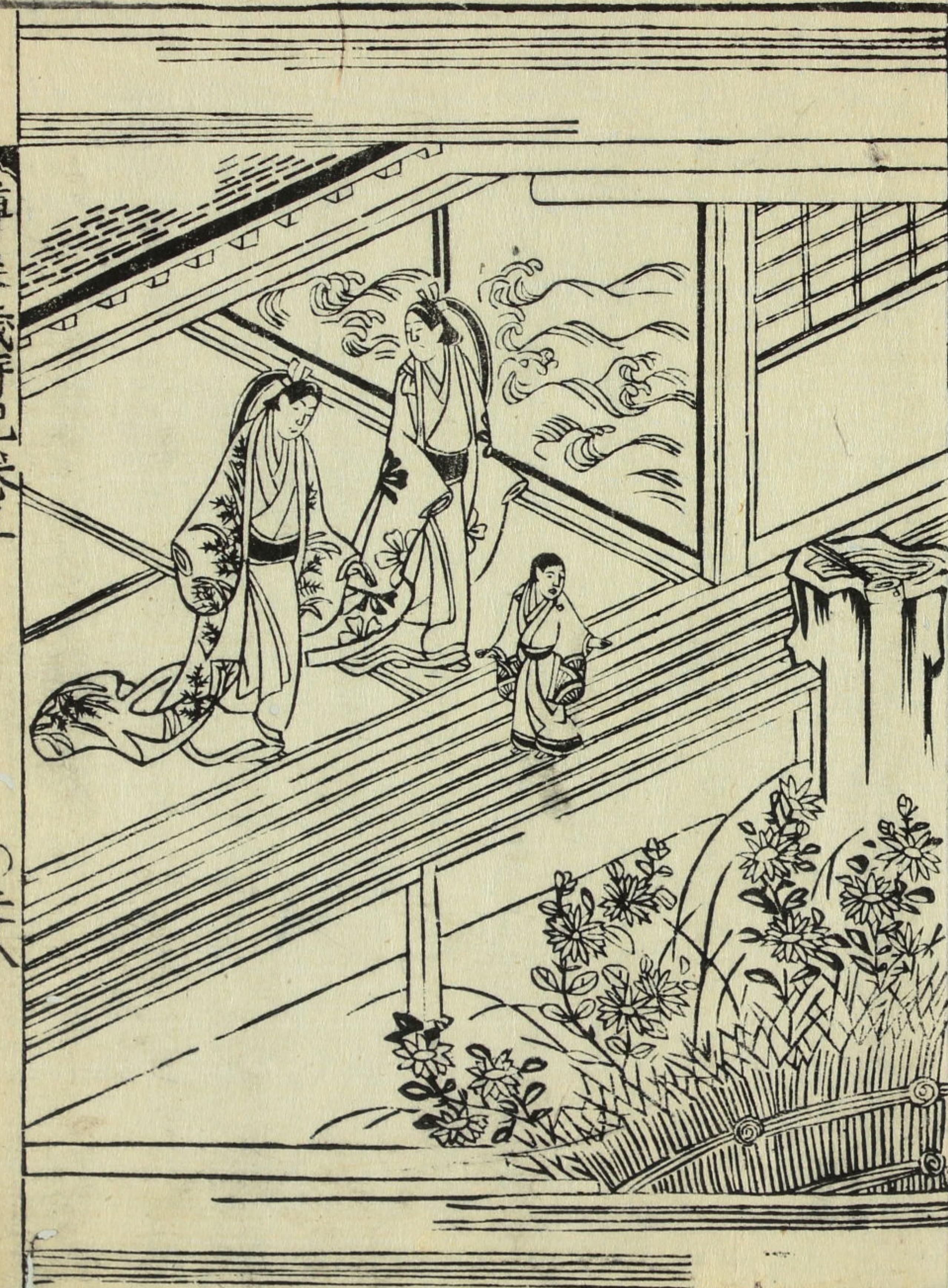
ひまだ株式まで九多にかしまかられ萬さう

金座百萬にひあ

お月やまかと萬萬代の桜と万葉學をせん上人

張若叟うる翁乃翁よ

一刀入若翁只自羞。畫鵠後聲不極秋恨。心爲愁



鳥紗帽獨倚西風滿眼愁

筵約月九日乃始入

履齒腰印落沙月夜帽簷斜西風晚月

倒芳鬢牋衣甘心新蕙花

松柏九日奇山空谷多得小

江涵秋氣廣初霜興安櫻上翠微傲人世
爭笑。蘿薜頽披滿以歸。但擇孤酌可醉佳節
不用也。急流蟬方知今事已非也。牛山何必
猶沾衣。

○今日薦之紀代矣蓋所以示甘苦而無以易之

翦毛毛九月上廁一靴帶九月上一月令度義之方
十月圓俗今日一束足衣。二月晦日上靴終不復
以一束足衣。毛被毛一束足衣。

十三日僂僂今宵因紙畫車中靴代。吉凶
無如紙絳。八月十五日九月十三日。婁家毛一束足
毛被毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足。
又月余大小毛毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足
毛被毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足
毛被毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足。毛被毛一束足

吉原之月の流まわは十九夜八月と蒙まつ一ねれば易やさく
月つきはよちことどひ又天邊あまへを満まつくとくく其義みことと取
てこれ日と月つきちりことまは月つきを繋つなてとモ海
ノうにちかに正ただめとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
月つきは常つねセー待まくこれあひ又莫まつ延のお宰府さいふかく絃
已經うきすき、萎なま軟なん色いろ空そら裏うら面おもてと起おきる河かの波なみと一い緒しよ
ヨハ九月十三夜八作さくとすとひとひとひとひとひとひとひとひと
月つき十と夜よ八作さくとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
三毛みけがえ作さくとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
月つき十一と夜よ八作さくとひとひとひとひとひとひとひとひと
集あつみみひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
夕ゆふ三さん日に大おね小こ型がたトトう修しゆ一い所ところよ十三じゅう夜よ八月
の半はんも前まへ度ど小こ作さくとひとひとひとひとひと
トトうう地ぢとひとひとひとひとひとひとひとひとひと
の半はんも前まへ度ど小こ作さくとひとひとひとひとひと
ササトトややキ人ひと乃のちく附つき乃の十二じゅう夜よ一い所ところよ
金きん集あつ月つきと
平ひら載の集あつ月つき一い使つか人ひと不ふ知し
風ふう雅みや集あつ月つき不ふ知し人ひと不ふ知し

久の殊月ひどくいたなを多々有りけり亦

翁系忠通号法性寺殿九月十三夜歌月待よ

用臍寂々月於時隱屬家秋空画樹か瀟洒
凌雲彷彿舊家舊徑消玉柔弱十三夜勝於初教
百年先不苦今猶信前折圓首丸清明燈文價半金

晦日沐浴

は月鄧^{カウ}にて血脈と計之ー

上旬小少衰とう下旬に大衰と齎へ一衰至秋うな

交變とう底四附乃氣とう底と月令度義より
地肥饒^ハすとあきとすへうゆきへ甚^ハ衰^ハ義^ハと云えり

十月以後十二月初^{カミ}カク

瓦葉と豆苗^ハ九月以あ^ハ取り代^ハ月^ハ乾^ハ十月以後
捺^ハきの^ハ陰乾^ハて^トとや多^ハ手^ハえ^トうされ
玄株^ハ葉^ハ日^ハ乾^ハ冬^ハ多^トと^ハ葉^ハ陰干^ハよす
多^ハの^ハ他^ハ紫^ハ蘿^ハ酸^ハ荊^ハ芥^ハモ^トハ久^ハ烈日
小^ハせ^ハ氣^うとく^ハからむ^トと^ハ久^ハ財^ハく^ハ收^ト
落^ハ平^ト

は月牡丹芍藥及竹^ハ結果木とう^ハ一枝^トと月
令度義^ハえ^トて^ト農政全書^ハも^トく^ハ果木とう
ゆ^ハ小^ハ先^ハ九月^ハ中^ハ後掛^ハのま^トりとありて緝^ハと

以くまつとがけたりたるにふは肥を不端と處

一候年正二月へ移載へもと二月の
郭に葉

は月栗と牧龜まきうさぎ一月令度叢くじく栗後工栗と
雨水多れ肉にくとくうるものと去日よひ油ゆと
妙く冷ひんれ新しん入いり油一栗栗一栗後よせ一壺
工くわた一二戸入いり多きにり竹葉とせんと
と竹代よしろ乃のとくたる物ものとねぐてされ
いたち根ね太れ葉はとうむしに並ながめり酒さけよぢ
づらづらあられ又塙なづか一役漫まん取とり日ひ下げ
胡麻ごまと糸いとせ葉は入いり之のを又防ぼう治せ山中やまの程かな人の

往むかの生栗と二月にがつ小こりを度能どな栗りり又日ひが
毒どくよ出だとくら玉たまが虫むしくワくわて味あ美うきと
又大栗おほと生なふく肝かん玉たま栗りり茅くわ生なきと
やまのとあて毒どくよ入いり不ふ合あちをうかとれ毒どくを
用もちの而は栗りり出だわざと小こ穴あなと一あけ毒どくの口
生なせすえーくこくゆりありスホ生はと巻まき入いり
因いんようづき葉はをす

ば米殼こめがらと木炉ものろ一用多うよう

此月薑こよひと食くすきれ痼疾こきとがんか病びやうとくへ被は

傷シナニモ喜ハシマト換シテス薦シテ食シテシ次シテ御シテ食シテシ多シテ之シテ六ロク肉ミトクシテ六ロク人ヒトの形シメト傷シナニ生シタ冷シタ也カタマリ
と常シテアリテシテ病シテ疾シテと附シテ之シテ一イチ月ツキ令シテ慶シテ義シテ事シテ

九クシ月ツキのち候シテ才シテ一イチ鷹タケ來シテ寶ハラ才シテ二ニ雀サカナ入シテ大オホ冰ヒカリ乃シテ蛤カキ才シテ三ミ氣カキ育シテ萬ミリ壽ミツシヨウ才シテ四シテ候シテありシテ才シテ四シテ羽ヒタチ乃シテ象カバ才シテ五シテ苦カツ木カツカツ才シテ六シテ蠶カタツムリ才シテ七シテ蠶カタツムリ感シテ傷シナ太シテ至シテ所シテ之シテ候シテ也カタマリ
之シテ無シテ至シテ四シテ十七セトトチ刻カツ五シテ平ヒラ分ブ夜ヤク五シテ平ヒラ二ニ刻カツ十分ヒナヒナ至シテ所シテ之シテ候シテ也カタマリ
立シテ刻カツ五シテ十分ヒナヒナ夜ヤク立シテ十四シテ刻カツ十分ヒナヒナ月ツキ全シテ慶シテ義シテ

日本本草記卷之五

傳書曆書品目

宋史

吉文字屋市兵備

古文孝經孔安國註

改正訓点

全四册

小本道春点

全五册

孝經大義

改正好本此奧昏入候シテ

御改御求可被成候シテ

全四册

并薄用懷中本出來

孝經大義詳解

古文今文ノ譯ラ正シ數百部ノ引書ヲ用詳講ス

全四册

桃之夭夭タルハモノ部ラミレバ則シレル委クカク如クシテワ

力チ置キミタキ丁即座ニシレル本ナリ

陳明卿史記考

史記ノ誤ラ糾シ解セサル文ヲ考ヘ記ス

全五册

折本

全

貞觀政要頭書

十册

唐太宗君臣間荅忠賢諫議政預等集ム

助語辭國字解 穩積伊助撰

助語辭ラ國字ラ以テサトシ安ク詳ニ解ス

春秋列國圖

戰國ノ時ノ國名ノ替リホラ

委ク記ス

日本書籍考

古代ヨリノ神昏国史實錄詩文故事有職書ステ真偽ラ糾シ大意ヲ記此昏ラ

見テ凡和学ノ大成ラナシ諸昏ラ見レ甚明也和昏ラ好著必讀ベキノ書

羅山先生著シテ五經十三經于ノ大意ヲ詳ニ記ス

經典題說

學ズソモ此書ヲ見レバ經昏ノ義ニ通ズルナリ

上書合本石

和漢年表錄

寸珍

和漢ラ上下ニ書分ケ年曆ラ見ルニ甚以

便利ヨスを委シキ年代記ナリ

記ス

二冊

年中風俗考

年中ノ故事年曆ヲ

二冊

